

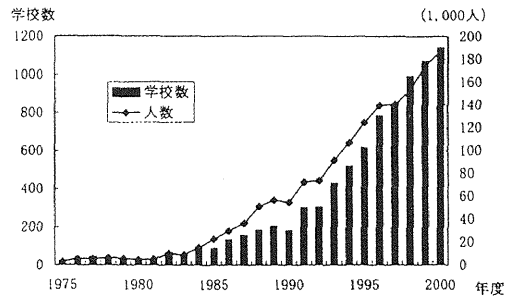
# 高等学校における海外修学旅行の諸類型

—地域性の考察を中心として—

羽 成 祐 子\*

## 1. はじめに

修学旅行は、明治期から行われている日本独自の旅行形態である。その後、時代状況の変化により、旅行の目的地や旅行形態は変化したが、現在まで続く主要な学校行事となっている。修学旅行は1958年度版中学校学習指導要領によって、「特別教育活動」の中の「学校行事等」に「遠足・修学旅行」として教育課程上に位置づけられた。1998年度版学習指導要領においても「特別活動」の「学校行事」のうち「旅行・集団宿泊の行事」の一つとして位置づけられ、「平素と異なる生活環境にあつて、見聞を広め、自然や文化などに親しむとともに、集団生活の在り方や公衆道徳などについての望ましい体験を積むことができるような活動を行うこと」を目的として行なわれている。また、国際化に伴って、近年では特に国際理解教育の重要性が再認識され、高等学校における海外修学旅行は近年増加傾向にある(第1図)。



第1図 海外修学旅行実施校数と参加人数

日本修学旅行協会 (2001) による

修学旅行に関する先行研究は、現場の教職員による実践的な研究が数多く存在する。それは、国内修学旅行に関するものが多く、海外修学旅行に関する報告も近年増えつつあるが、稀である。

1970年代後半から1980年代前半にかけて、修学旅行の形骸化が問題となり、その教育的意義が問われ、存続が疑問視されたことから、そのあり方を理論的に思考して実践につなげていこうという動きがみられた。その代表的なものに鈴木健一(1983)、渋沢文隆(1982・1986)がある。鈴木健一(1983)は、実施内容や指導方法等についてマンネリ化しつつある修学旅行を、教育活動として効率的なものにするために、さまざまな側面から再検討している。渋沢文隆(1982・1986)は、我が国の修学旅行の歴史を振り返ることにより、修学旅行の形骸化の背景・要因を分析し、形骸化した修学旅行からの脱却のためには、生徒や地域の実情に応じてそれぞれの学校が主体性をもって取り組むことが重要であるとしている。このような教育的意義に対する反省や課題の提起によって、修学旅行は多様化傾向を示すこととなる。

海外修学旅行を地理教育の視点から扱った研究としては、長坂政信(1989)がある。韓国・中国へ海外修学旅行を実施した高校の実態を分析し、海外修学旅行は異文化理解のための一つの選択肢として大きな役割をもつが、単に文化遺産を見聞するだけでは異文化理解は達成されないとして、地理教育の有用性を指摘している。また、社会科教育と海外修学旅行のかかわりを論じたものとして相原正義(1996)、桜井祥行(1998)、黒川圭一(2000)などがある。

さらに、国立教育研究所による『異なる文化間の理解を伸ばすための効果的な教育・学習活動の研究(昭和63年度科学研究費補助金による研究;一般研究C)』の成果として、橋迫和幸、有本良彦、渡部宗助の報告がある。3氏は、それぞれアジア、アメリカ合衆国、第二次戦前日本の中等学校における海外修学旅行に着目し、実施校訪問と資料収集を行っている。

以上のように、従来の研究においては、海外修学旅行を実施している数校の事例を扱った研究

や実践報告が多く、個々の学校における修学旅行に対する取り組みやその変遷については明らかにされている。しかし、海外修学旅行の全国的な傾向や地域的な差異を扱った研究はみられない。国際理解教育の進展に伴い、海外修学旅行が全国的に普及していく過程は一樣ではない。それぞれの地域的な事情により、その浸透の度合いは異なっている。そこで、本研究は、海外修学旅行の全国的な傾向を学校所在地と訪問先からみた地域性の考察を中心とした類型化によって把握し、各類型ごとの特徴から海外修学旅行の変化パターンを明らかにすることを目的とする。さらに、今後の海外修学旅行の発展可能性を探ることも試みる。

海外修学旅行の具体的な実施状況を把握するために、2001年9月に海外修学旅行を実施したことのある全国の高等学校813校に郵送によるアンケート調査を実施した。この結果、全体の回収率36%にあたる292校から回答を得ることができ、有効回答数は265であった。これをもとに、海外修学旅行の実施にいたる経緯、訪問先の決定理由、海外修学旅行のねらい、訪問先ごとの海外修学旅行の現地での活動といった海外修学旅行の実施状況を整理し、日本の高等学校における海外修学旅行の特徴を把握する。

さらに、海外修学旅行に地域差がみられる理由を探る方法として、海外修学旅行の訪問先と現地での活動を指標とした類型化を行った。類型化することによって、海外修学旅行の発展段階や地域性についての分析が可能となり、より実態に即した日本の高等学校における海外修学旅行像をとらえることができると考えるからである。

最後に、この類型化からの分析、考察から、日本の高等学校における海外修学旅行の変化のパターンを示して、その変化パターンから、今後の海外修学旅行の発展可能性を探っていきたい。

## 2. 海外修学旅行の訪問先

訪問先が規定されている一部の公立高校を除いては、各学校ごとの海外修学旅行の目的によって、訪問先が決定されている。まず、海外修学旅行の実施にいたった経緯と訪問先決定の理由をみていくこととする。

### (1) 海外修学旅行の実施にいたる経緯

アンケートでは、実施にいたる経緯についての自由記述による回答を求めた。その主要なものを整理して第1表を作成した。「国際理解」、「海外に目を向ける」、「国際化への対応」、「国際交流」といった国際理解教育の一環とする学校が多かった。次いで、「国際経済科、国際教養科といった国際系学科の設置」、「特色ある学校づくりの一環」、「総合学科への再編」などの学校側の教育方針の変化をあげる学校もあった。さらに、「姉妹校提携を契機」として海外修学旅行の実施に踏み切る学校もあった。また、欧米諸国を訪問先としている学校には「現地に併設校や語学研修施設の開設したこと」を契機として、語学研修を中心とした海外修学旅行を開始した場合もある。

実施にいたる経緯の背後には、各国政府観光局の熱心な誘致活動もある。修学旅行向けのパンフレットの作成やセミナーを開催するなど積極的な活動を行っている。

第1表 海外修学旅行の実施にいたる経緯

順位	経緯	校数
1	国際理解	36
1	海外に目を向ける	36
3	国際化への対応	33
4	国際交流	26
5	国際的視野の育成	22
6	外国語学科・国際系学科の設置	21
7	異文化体験	20
8	特色ある学校づくり	17
9	国際感覚を養う	9
10	総合学科への再編	7
11	姉妹校提携	6
12	アジアを知る	5

アンケート調査(2001年9月)により作成

## (2) 訪問先とその決定理由

次に、海外修学旅行における訪問先とその決定理由をみていく。第2図は、現在の海外修学旅行の訪問先を示したものである。

韓国への修学旅行を実施している学校は、60校（公立42校、私立18校）である。石川県、鳥取県など日本海側の県に多く分布している。これは、近年の環日本海交流を推進の動きが反映しているのではないだろうか。

韓国を訪問先とする理由は、「最も近い隣国」、「歴史的な関係が深いこと」、「経費の安さ」、「直行便がある」などであった。

中国への修学旅行を行っている学校は、57校（公立39校、私立18校）である。そのうち、台湾と香港を訪問先とするものがそれぞれ3校ずつ含まれている。九州地方の公立高校と関東地方の私立高校の実施校が多い。中国を訪問先とする理由としては、「日本と中国は歴史的につながりの深い国である」、「現在、目覚しく発展している中国を実際に見てほしい」、「歴史的遺産が豊富で学習効果が高い」、「学校交流が可能」、「治安・安全面」、「日程・費用の制約」などがあげられていた。

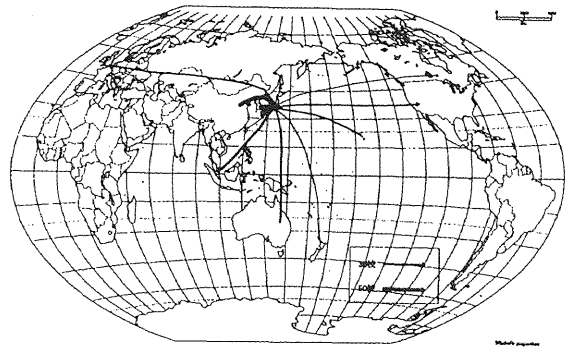
東南アジアへの修学旅行を行っている学校は、36校（公立24校、私立12校）である。特に、岩手県、静岡県、兵庫県における実施校が多く、大半が公立高校の実施である。訪問国の内訳は、シンガポール17校、シンガポール・マレーシア12校、マレーシア1校、タイ5校、インドネシア1校である。訪問先をシンガポール・マレーシアに決定した理由として、「英語が公用語」、「費用・日程」、「治安」、「多民族国家」、「東南アジア諸国のなかで政情が安定している」などがあげられている。また、訪問先をタイとした理由は、「東南アジア諸国の中でも政情が安定している」、「親日的である」であった。訪問先として東南アジアが増加したのは、1990年代後半のことである。韓国や中国への修学旅行を実施していた学校が、英語圏を求めて訪問先を英語が公用語の一つとなっているシンガポール・マレーシアに変更した例が多くみられる。

オセアニアへの修学旅行を実施している学校は、31校（公立11校、私立20校）である。その実施校の分布は、九州地方と関東地方に集中している。その訪問国の内訳は、オーストラリア23校、ニュージーランド8校である。オセアニアを訪問先とした理由には、「英語圏である」、「治安がよい」、「時差が少ない」などがあげられている。また、「ホームステイやファームステイの受入れに積極的である」こともあげられる。これまでの名所旧跡を表面的に見学することが主となっていた修学旅行から、ホームステイなどを通して本格的な異文化体験を目的とする内容の充実した修学旅行を目指す学校の意図がうかがえる。

欧米諸国への修学旅行を実施しているのは、52校（公立7校、私立45校）である。関東地方の実施校が多くみられる。その訪問国の内訳は、アメリカ合衆国（ハワイ・グアムを除く）16校、次いで、ハワイ・グアム14校、イギリス7校などである。欧米諸国を訪問先とした理由としては、「英語圏であること」、「治安・安全性」をあげる学校が多い。

訪問先選択制による海外修学旅行を実施しているのは、29校（公立2校、私立27校）である。

海外修学旅行における訪問先の現状としては、韓国や中国を中心としたアジア諸国へ修学旅行



第2図 海外修学旅行の訪問先

アンケート調査（2001年9月）により作成

を実施するのは、公立高校が多く、オセアニアや欧米諸国への修学旅行は私立高校が多くなっている。ここに、教育委員会の定める実施基準によって規制されている公立高校とそれにとらわれず学校独自の教育方針により実施することができる私立高校との差異がはっきり表われている。また、地域的な面に目を向けてみると、環日本海地域には、韓国や中国を訪問先とする学校が多いなど、学校所在地の地域的な事情も訪問先の決定に大きくかかわっているといえる。

### (3) 海外修学旅行のねらい

海外修学旅行を実施するねらいとして「国際理解」や「異文化体験」、「国際交流」を重要視している学校が多くなっている（第2表）。この他に、ある訪問先特有の地域的なねらいがある。国際理解の一部であるが、韓国や中国を含むアジア諸国では、歴史的な関係や将来の両国関係を考える機会としようとして修学旅行が実施される場合も多い。

第2表 訪問先別海外修学旅行のねらい

訪問先 ねらい	韓国		中国		東南ア ジア		オセア ニア		欧米		選択制	選択率 (%)
	数	選択率 (%)	数	選択率 (%)	数	選択率 (%)	数	選択率 (%)	数	選択率 (%)		
国際理解	43	71.7	42	73.7	27	75.0	27	87.1	42	80.8	16	55.2
国際交流	36	60.0	33	57.9	16	44.4	17	54.8	20	38.5	14	48.3
平和教育	10	16.7	4	7.0	5	13.9	3	9.7	2	3.8	3	10.3
環境教育	1	1.7	0	0.0	1	2.8	3	9.7	2	3.8	0	0.0
異文化体験	36	60.0	38	66.7	21	58.3	24	77.4	35	67.3	13	44.8
福祉教育	0	0.0	0	0.0	1	2.8	1	3.2	1	1.9	0	0.0
その他	2	3.3	1	1.8	3	8.3	4	12.9	8	15.4	3	10.3
回答数	60	100.0	57	100.0	36	100.0	31	100.0	52	100.0	29	100.0

アンケート調査（2001年9月）により作成（複数回答）

### 3. 海外修学旅行の現地での活動

海外修学旅行が、名所旧跡の見学を中心とした旅行であった時代は終わり、現在は、現地校との交流、ホームステイ、語学研修等を主な目的とした実施内容へと変化し、多様性に富んだ修学旅行になってきた。ここでは、訪問先ごとに現地でのどのような活動が行われているのかをまとめていく。その際のデータとして、アンケート調査の項目「海外修学旅行中の現地での活動（第3表）」と入手できた修学旅行のしおりや日程表を使用する<sup>1)</sup>。

韓国・中国への修学旅行の特徴としては、現地の学校との「学校交流」を7割以上の学校で実施していること、「体験学習」または「フィールド・ワーク」として、グループで計画を立て行動する班別自主研修を実施する学校が多いことがあげられる。これらの活動を通して、現地の人びととのふれあいや異文化体験が可能となり、異文化理解や学習の動機付けとなる。

東南アジアへの修学旅行は、生徒が主体となって計画していく自主研修がほぼ全ての学校で実施されていること、日系企業を中心とした企業見学を取り入れている学校が多いことが特徴である。

オセアニアへの修学旅行の特徴は、ホームステイやファームステイといった現地での生活体験を取り入れていることに特徴がある。また、2週間から3週間にわたる修学旅行を実施し、語学研

修を中心としたプログラムが行われていることは、アジア諸国への修学旅行にはみられないものである。

欧米諸国への修学旅行は、それぞれの訪問先ごとにその特性をいかした現地での活動が行われていることが特徴であるといえる。オセアニアと同様に長期にわたる修学旅行を実施している学校の中には、語学研修を主目的としている学校もあり、午前中に語学研修施設での研修、午後は自主研修またはホームステイといった形で実施されている。

第3表 海外修学旅行の現地での活動

訪問先	活動	学校交流 (校)	選択率 (%)	名所・旧跡 の見学(校)	選択率 (%)	ホームステ イ(校)	選択率 (%)	文化施設の 見学(校)	選択率 (%)
韓国		45	75.0	54	90.0	2	3.3	49	81.7
中国		44	78.6	54	96.4	3	5.4	47	83.9
東南アジア		22	61.1	32	88.9	2	5.6	27	75.0
オセアニア		27	81.8	28	84.8	13	39.4	25	75.8
欧米		33	64.7	44	86.3	12	23.5	39	76.5
選択制		20	69.0	29	100.0	20	69.0	29	100.0
全体		191	72.1	241	90.9	52	19.6	216	81.5

訪問先	活動	企業見学 (校)	選択率 (%)	フィールド ワーク(校)	選択率 (%)	語学研修 (校)	選択率 (%)	文化研修 (校)	選択率 (%)
韓国		1	1.7	9	15.0	0	0	5	8.3
中国		6	10.7	2	3.6	1	1.8	5	8.9
東南アジア		7	19.4	9	25.0	5	13.9	6	16.7
オセアニア		1	3.0	9	27.3	8	24.2	6	18.2
欧米		1	2.0	19	37.3	13	25.5	13	25.5
選択制		6	20.7	4	13.8	13	44.8	6	20.7
全体		22	8.3	52	19.6	40	15.1	41	15.5

訪問先	活動	環境学習 (校)	選択率 (%)	体験学習 (校)	選択率 (%)	その他 (校)	選択率 (%)	合計 (校)
韓国		0	0	13	21.7	5	8.3	60
中国		0	0	12	21.4	3	5.4	56
東南アジア		3	8.3	11	30.6	6	16.7	36
オセアニア		2	6.1	13	39.4	3	9.1	33
欧米		7	13.7	15	29.4	4	7.8	51
選択制		5	17.2	12	41.4	4	13.8	29
全体		17	6.4	76	28.7	25	9.4	265

アンケート調査 (2001年9月) により作成 (複数回答)

第4表 海外修学旅行における活動の種類と訪問先

活動内容 訪問先	見学中心型	学校交流型	体験学習型	生活体験型	複合型
韓国	○	◎	◎	×	◎
中国	○	◎	◎	×	◎
東南アジア	○	○	◎	×	◎
オセアニア	○	○	○	◎	○
欧米	○	◎	◎	○	○
選択制	○	○	○	○	◎

アンケート調査（2001年9月）により作成

#### 4.海外修学旅行の種類

##### (1)海外修学旅行の類型化

海外修学旅行に地域差がみられる理由を探る方法として、その訪問先と現地での活動を指標として類型化を行った。類型化によって、訪問先による違い、さらには海外修学旅行の発展段階についての分析が可能となり、より実態に即した日本の高等学校における海外修学旅行像をとらえることができる。

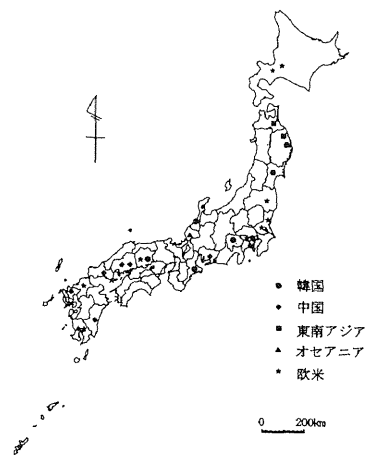
そこで、前章で整理した訪問先と現地での活動から見学中心型（各地の名所・旧跡の見学や博物館、美術館等の文化施設の見学を中心とした現地での活動を行う修学旅行）・学校交流型（学校交流を修学旅行における中心的な活動に位置付けている修学旅行）・体験学習型（グループ単位で計画を立て行動する班別自主研修や現地の文化やスポーツなどの各種の体験を取り入れていた修学旅行）・生活体験型（ホームステイやファームステイなどの生活体験を重視した修学旅行）・複合型（学校交流・体験学習・生活体験のうち複数を実施する修学旅行）の5つの類型と訪問先から第4表を作成した。なお、訪問先選択制による修学旅行は、訪問先選択型として1つの類型として扱うこととする。

##### (2)海外修学旅行の種類と訪問先

###### 1) 見学中心型

この類型に属するのは、韓国6校（10%〈韓国への修学旅行実施校に占める割合、以下同じ〉）、中国9校（16%）、東南アジア2校（6%）、オセアニア2校（6%）、欧米9校（17%）である（第3図）。この類型の特徴は、各地の名所・旧跡や博物館、美術館といった文化施設の見学を中心とした活動を行っていることである。韓国と中国とを合わせると15校となるが、今年度の場合は教科書問題により、例年行っている学校交流を実施できなかったため、見学中心の修学旅行に方向転換せざるを得なかったことによるところが大きいと考えられる。

この類型に属する学校は、1990年代後半に修学旅行を開



第3図 見学中心型の海外修学旅行実施校の分布

アンケート調査（2001年9月）により作成

始したところが多い。また、アジア地域を訪問先としている公立学校が多いところにこの特徴がみられる。一方、欧米諸国を訪問先としている学校は、ヨーロッパの複数の国を訪問しているところであり、移動時間が多くかかるため、学校交流等の見学以外の活動を組み込むことが難しい面もある。

## 2) 学校交流型

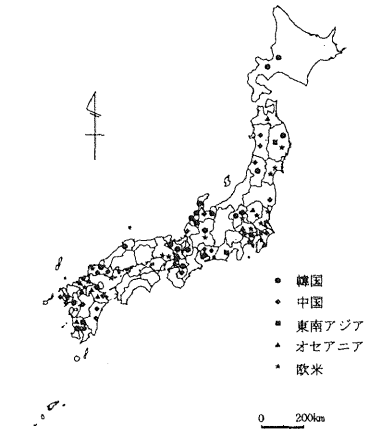
この類型に属するのは、韓国22校(37%)、中国24校(42%)、東南アジア5校(14%)、オセアニア9校(29%)、欧米19校(37%)である。この類型の特徴は、学校交流を修学旅行における中心的な活動に位置付けていることである。姉妹校あるいは交流校を訪問し、スポーツ交流やお互いの国の文化を紹介するといった内容の交流を行う学校が多いようである。学校交流型は、鹿児島県、長崎県、福岡県を中心とした九州地方や千葉県、茨城県を中心とした関東地方、山口県、兵庫県、石川県、愛知県などに分布が集中している(第4図)。一方、山口県・鳥根県を除く中国・四国地方には、実施校がみられない。この類型に含まれる学校は、1980年代後半から1990年代に海外修学旅行を開始したところが多く、開始年度は一様ではない。また、韓国、中国、欧米諸国を訪問先とする学校のそれぞれ40%前後がこの類型に属している。

## 3) 体験学習型

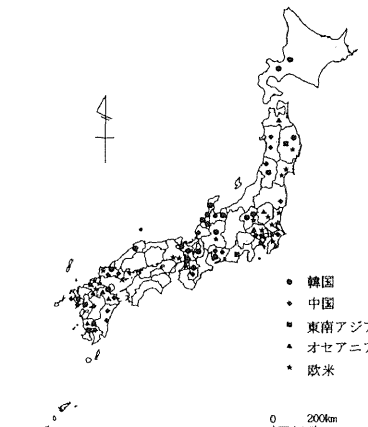
この類型に属するのは、韓国14校(23%)、中国3校(5%)、東南アジア14校(39%)、オセアニア5校(16%)、欧米12校(23%)である。この類型の特徴は、グループ単位で計画を立て行動する班別自主研修や現地の文化やスポーツなどの各種の体験を取り入れていることである。この類型は、学校交流型のあまりみられなかった中国・四国地方や静岡県、山梨県などに多く分布している(第5図)。この類型に属する学校は、1990年代後半に海外修学旅行を開始した学校が多く、国内修学旅行で実施して効果のあった体験学習を海外修学旅行でも取り入れていると考えられる。

## 4) 生活体験型

この類型に属する学校は、ホームステイやファームステイを実施している、オセアニア13校(42%)、欧米8校



第4図 学校交流型の海外修学旅行実施校の分布  
アンケート調査(2001年9月)により作成



第5図 体験学習型の海外修学旅行実施校の分布  
アンケート調査(2001年9月)により作成

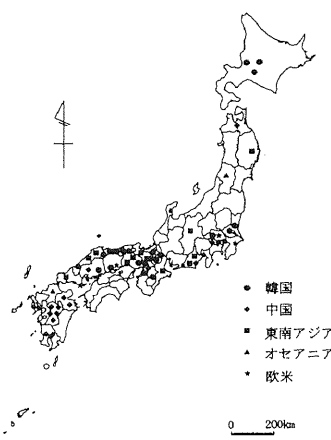


第6図 生活体験型の海外修学旅行実施校の分布  
アンケート調査(2001年9月)により作成

(15%)であり、アジア地域を訪問先とする修学旅行には該当するものがない<sup>10)</sup>。この類型は、関東地方に集中してみられる(第6図)。これは、関東地方の私立高校が、オセアニアや欧米諸国への修学旅行に際して、現地の人々の生活や文化に触れる機会としてホームステイやファームステイを積極的に導入しているためである。

#### 5) 複合型

学校交流・体験学習・生活体験のうち複数を実施している学校が、この類型に属する。また、語学研修を目的とする修学旅行を実施している学校もこの類型に含めることとする。この類型に属するのは、韓国18校(30%)、中国21校(37%)、東南アジア15校(42%)、オセアニア2校(6%)、欧米4校(8%)である。この類型には、九州地方、中国地方、近畿地方の学校が多く属している(第7図)。1980年代後半から1990年代に海外修学旅行を開始した学校で、試行錯誤のなかで、より効果的な修学旅行を模索する中でさまざまな活動を取り入れた形の修学旅行へと変化していったと予想される。訪問先を中国、韓国、東南アジアが中心であり、学校交流と体験学習を組み合わせた修学旅行を実施している。



第7図 複合型の海外修学旅行実施校の分布  
アンケート調査(2001年9月)により作成

#### 6) 訪問先選択型

この類型には、訪問先を複数設定して、生徒の希望による選択、または学科・コースにより訪問先が異なる学校29校が属する。

多様化する生徒のニーズに応えるかたちで語学研修、現地での生活体験、ボランティア活動といった複数の目的やテーマを設定している。この類型は、静岡県や大阪府、熊本県で多くみられる(第8図)。1980年代から1990年代前半にかけて海外修学旅行を開始した学校が多く、開始当初は、全員で同一の訪問先で実施していた修学旅行を発展させ、複数の訪問先で実施するようになった学校が多い。海外修学旅行の開始後、数年が経過して、学科・コースの特性や生徒の希望にそった形で訪問先選択制に移行していったようである。



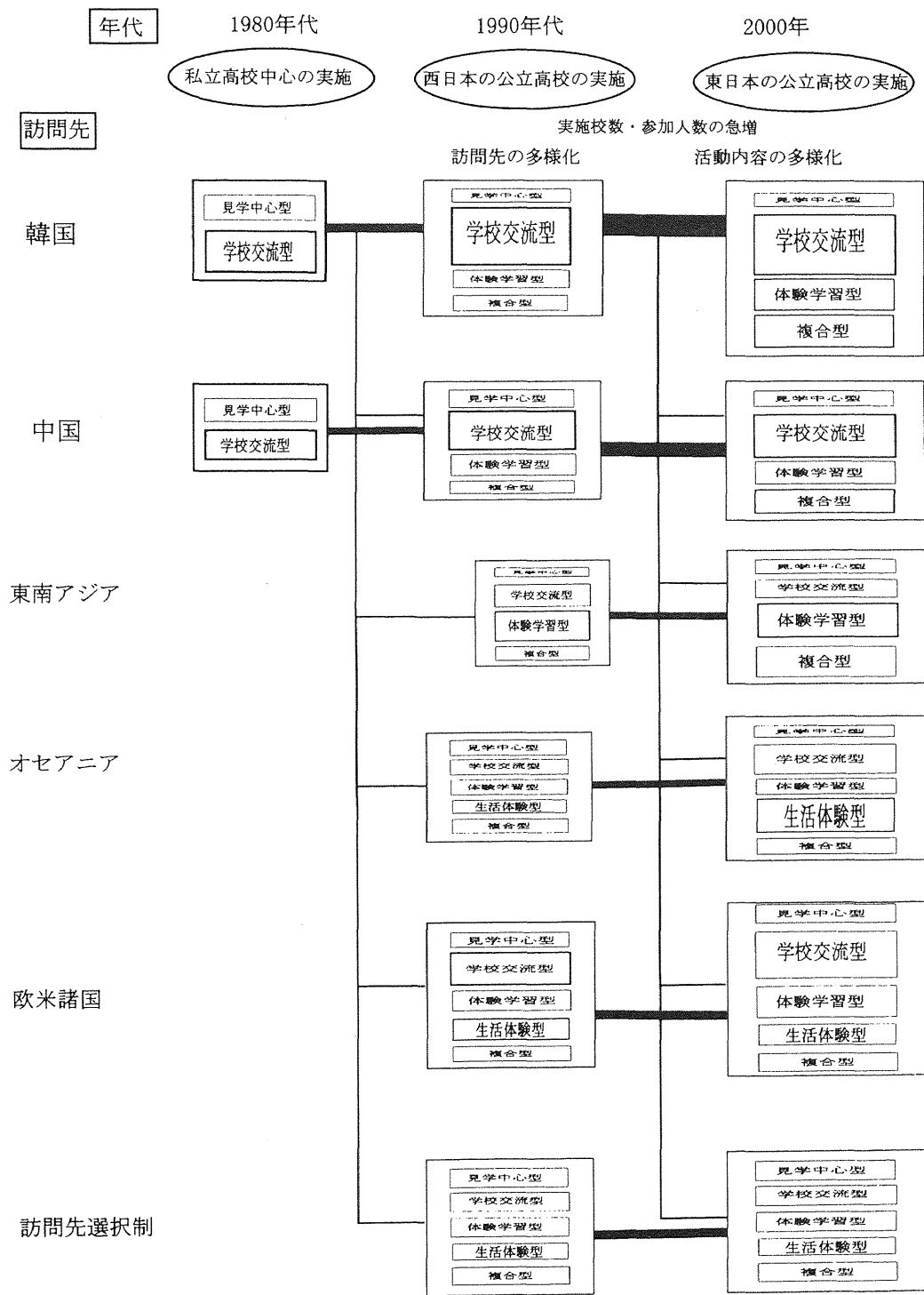
第8図 訪問先選択型の海外修学旅行実施校の分布  
アンケート調査(2001年9月)により作成

### 5. 海外修学旅行の変化パターン

日本の高等学校における海外修学旅行がいつごろ開始され、どのような変化をとげてきたのかを第9図に示した。

海外修学旅行は1970年代に、その意義をいち早く認めた私立高校を中心として実施され始めた。当時の訪問先は、韓国や中国であった。その後、1980年代後半になると九州地方や中国地方の各教育委員会が、公立高校に対する海外修学旅行の実施を許可し始めた。国際理解教育や国際





第9図 海外修学旅行の変化パターン

友好関係の促進といった社会の要請に応えたものであるが、円高、貿易黒字の増加、地方空港の開港やその国際路線の維持という要因も見逃せない。これに伴って、海外修学旅行を開始した公立高校の訪問先も韓国や中国が中心であった。さらに、1990年代には近畿地方、中部地方、東北地方の公立高校でも海外修学旅行が実施されるようになってきた。そのため、海外修学旅行の実施校数と参加生徒数は急増している。公立高校の実施に伴って、以前から海外修学旅行を実施してきた私立高校は、公立高校との差別化を図るため訪問先をオセアニアや欧米諸国へと変更する学校も出てきている。

現在の海外修学旅行の訪問先としては、韓国、中国などの近隣アジア諸国が中心である。韓国を訪問先とする学校のうち、訪問先を変更したことのある学校は3校と少ない。これは、最も近い隣国である韓国から海外修学旅行を開始する学校が多いことを示している。一方で、韓国からその他の地域へ変更した例は多い。早い時期から身近な韓国での修学旅行を実施していた学校では、その経験を生かしつつ新たな目的地を求めているのではないだろうか。また、中国を訪問先とする学校のうち、訪問先を変更したことのある学校は、21校であるが、うち15校が韓国から中国への変更であった。

一方で、私立高校を中心として、アメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ、ヨーロッパなど世界各地へ広がりを見せるようになってきている。ホームステイなどを通して本格的な異文化体験をするといった目的達成のために、アジア諸国から訪問先を変更し、オセアニアでの修学旅行を実施するにいたった学校が多い。そのため、1990年代後半からオセアニア諸国への修学旅行を開始した学校が多い。特に、1990年以前に海外修学旅行を開始した福岡県や鹿児島県をはじめとした九州地方の各県と関東地方の私立校においては、訪問先を変更し現在にいたっている場合が多い。開始当初は、韓国や中国などの近隣諸国を訪問していた学校が、数回の訪問先変更の末、欧米諸国への修学旅行を実施する例もあった。また、訪問先選択制の学校は、開始当初から複数の訪問先を設定して海外修学旅行を実施している場合もあるが、多くは海外修学旅行の開始後数年を経過し、生徒の希望や海外修学旅行に対する学校側の方針の変化により訪問先選択制へと移行している。

## 6. むすび

本研究は、海外修学旅行の全国的な傾向を学校所在地と訪問先からみた地域性についての考察を中心とした類型化によって把握し、各類型ごとの特徴から海外修学旅行の変化パターンを明らかにしようとしてきた。その結果、海外修学旅行の訪問先の多様化傾向が明らかになった。海外修学旅行の訪問先に、治安の良いこと、交通機関の安全性、英語圏であることを望む学校が多い。さらに、見学中心の修学旅行から、体験的な要素をとりこんだ活動や語学研修等を修学旅行で行うことでより教育的意義をもたせようとする動きもみられるようになってきた。このため、韓国、中国などの近隣アジア諸国での海外修学旅行を実施していた学校が、東南アジアやオセアニア、欧米諸国へと訪問先を変更する傾向がみられる。

また、海外修学旅行は、訪問先の多様化とともに、現地での活動も多様化していることが明らかになった。海外修学旅行の開始当初は、試行錯誤の段階にあり、現地での活動も見学と学校交流が中心となることが多かった。その後、検討が加えられ、現地での活動に体験的要素を盛り込んだり、テーマを決めた自主研修を取り入れたり、さらに語学研修やホームステイを導入するなど、海外修学旅行の現地での活動にも変化がみられるようになってきた。現地での活動の変化は、

海外修学旅行に対する期待の変化とも読み取れる。修学旅行で海外に行くことが目的となっていた時代から、海外に行って何かを体験すること、あるいは何かを身につけることへと目的が変化している。これは、海外修学旅行を長年実施している学校のみにもみられる傾向ではなく、開始直後の学校においても自主研修やホームステイ、語学研修をとりいれている例は少なくない。

訪問先の面からみても、活動内容の面からみても海外修学旅行の実施については明らかに地域的な差異がみられる。早くから海外修学旅行を実施している関東地方の私立高校と九州地方の公立高校、私立高校において多様化が進行していることから、この地域的な差異は海外修学旅行の実施経験による差であり、発展の段階がそこに表われていると考えられる。

本研究においては、資料上の制約のために、学校あるいは教師側からの検討が中心とならざるを得なかった。しかしながら、海外修学旅行の主役はあくまでも生徒であり、生徒の側からも海外修学旅行の実態を把握する必要がある。生徒が海外への修学旅行によって、何を見、何を感じ、何を学んだかは非常に興味深いことである。また、学校交流を行った場合には、交流相手となった現地校の生徒たちにも何らかの変化が起こっているはずである。今後は、海外修学旅行を生徒の立場、教師の立場、学校、地域といったさまざまな側面から総合的に研究していきたい。

〈註〉

- i) 「名所・旧跡の見学」、「文化施設の見学」は多くの学校で行われているため、ここでは分析の対象からは除外した。
- ii) アジア地域への修学旅行についても、学校交流に際して交流相手の家庭を訪問することはあるが、その場合は学校交流型へ属することとする。

〈文献〉

- 相原正義 (1996) : 韓国修学旅行. 地理 (現代社会をどう教えるか), 増刊41-11, pp.95-98.
- 黒川圭一 (2000) : 中国修学旅行における日中高校生交流. 歴史地理教育, 604, pp.20-23.
- 桜井祥行 (1998) : 韓国修学旅行と世界史授業. 歴史地理教育, 584, pp.50-53.
- 鈴木健一 (1983) : 『修学旅行の理論と実際』ぎょうせい, 186p.
- 渋沢文隆 (1982) : わが国の修学旅行のあゆみと今後の方向性に関する試論 (第一報). 筑波大学附属中学校研究紀要, 33, pp.9-31.
- 渋沢文隆 (1986) : わが国の修学旅行のあゆみと今後の方向性に関する試論 (第二報). 筑波大学附属中学校研究紀要, 38, pp.1-25.
- 長坂政信 (1989) : 高校海外修学旅行の実態と地理教育の役割. 新地理, 37 (2)pp.26-35.
- 日本修学旅行協会 (2001) : 『修学旅行のすべて2001年度版』日本修学旅行協会.
- 日本修学旅行協会 (2001) : 『平成13年度全国中学校・高等学校の海外修学旅行等の実施状況』日本修学旅行協会